林檎の木

押田 ゆ佑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
林檎の木

【Ｎコード】
Ｎ９９００Ｆ

【作者名】
押田　ゆ佑

【あらすじ】
これは、自作短編小説を集めた短編小説集です。林檎の木の様に、沢山の小説が実をなる様にと名付けました。一つ一つが別々の世界への入口に繋がっています。時間と共に短編小説の実がなっていく事を目指し、日々育てていこうと思います。

黒猫を抱いて世界にさよならを（前書き）

黒猫のアナタと孤独を知った私の僅かな…最後の一日。

黒猫を抱いて世界にさよならを

いつからだろう
こんなに自分を隠し自分を追いこんだのは。

別れは突然だった。
朝から太陽は寂しそうに私を照らしていた日曜日。

昨日の夜、アナタは部屋から消えた、鈴の音も、餌をねだる声もしない。

寂しい夜も辛い朝もアナタは私を癒し、私はアナタを愛した。

なのに昨日、帰宅してドアを開けた時にアナタは夜に消えた。

『早く帰って来てよ…』

突然携帯が鳴り響く、静か過ぎる部屋に彼の声が微かに混じる。

急いで着替えて急いで彼の元へ向かった。

喫茶店の窓側の席に彼は居た。

ゆっくり近付き向き合う形で座り、彼を見つめた。

彼は静かに別れを告げた。
アナタと同じ様に別れを告げた。

喫茶店の苦いコーヒーに似た感覚が頭を突き刺した。

緩やかなジャズがブルースに似ていて、更に彼は静かに指輪を外した。

私は何故生まれたのだろう―

幼い頃から独りで寂しくて、でも黒い毛並みのアナタが居た。

あの言葉から彼と別れてから何時間たったのか…

途方に暮れ歩き出した私に冷たい涙が肌を掠めた。

雨はゆっくり降りだし冷静だった私の心が砕け散っていった。

傘は無い　心も濡れて

ずぶ濡れの私が店を閉めた商店街の一角に私を残した。

誰も前を通らない、ただ目の前にあるのは雨を受け止めている黒に近い灰色の冷たいアスファルトの地面だけだ。

私は本当の孤独を知った。携帯を開いても言葉をかけてくれる彼は居ない、家に帰っても笑顔をくれるアナタは居ない。

帰る場所など、もう何処にも無い。

……――

沈黙の向こう側に微かな鳴き声が聞こえる。

耳をすませて――息を堪えて――辺りを見渡して――

聞き覚えのある鳴き声――

アナタはそこに居た。

黒い毛並みに綺麗な大きな瞳。

私はゆっくり抱き上げて優しく抱き締めた。

『何処に行ってたの？心配したでしょ…』

総てを失った私の身体にアナタは鳴きながらザラザラのベロを私の頬にあてた。

『ニャー』

黒猫のアナタは、静かに私に抱き着いた。

暖かい――

お互い濡れているのに体温を感じ白い息を吐き出し、自然と涙が込み上げ…泣き続けた。

一瞬の幻の様で、永遠の光の様で…暫くすると雨は上がり、また太陽が雲の隙間から顔を出していた。

ずぶ濡れの私の胸には、もうアナタは居ない。

えっ…――

確かに感じた、確かに触った、確かにここに居た、確かに肌に触れ

た。
だけどアナタが居ない。
再び辺りを見渡しアナタを探した。
遠い遠い道の向こうにアナタの足跡を見つけて、それを指先で辿る様に歩き探し続けた。

川の土手の小さな段ボールの中にアナタは居た。
深く眠り、もう目覚める事もない姿で私の目の前で眠っていた。
『最後の最後までアナタは私の傍に居たのね』
私はアナタの寝顔を見て眠気を感じた、充分に寝たはずなのに、眠くて眠くて仕方がなかった。
『おいで…』
僅かな力でアナタを抱き締めた。
『アナタの傍に私がいるから、独りにしないでね…』
ゆっくり鼓動を重ね、ゆっくり息をした。
ゆっくり目蓋を閉じて、ゆっくり鍵をしめた。
次にドアを開けた時、アナタは白い世界で走り回り、私を見つけると近寄ると、またザラザラのベロで頬に触れる。

さっきまでの悲しみや痛みが嘘の様に消えて無くなっていた。

またアナタを抱き締め、空を眺めながら総てを感じながら眠りにつく…

きっともう二度と目覚めないとわかっていても

私は深く目蓋を下ろし、静かに世界に別れを告げた。

花火とあの子（前書き）

2年前の夏に、あの子と見た花火は2年後の今日、独りで眺めている。自らの固定概念を花火が消えるかの様に一つ一つ消し去り、それと同時に花火は今ではもう、二度と触れる事の出来ない、あの子の事を優しく包み思い出さしてくれた。

花火とあの子

夏のあの頃、そう…もう2年も前になる。
あの子と二人でみた花火は空に舞い空に輝き空に消えた。
僅かな時間の中で瞳の中に洪水の様に流れ込んだ色彩は一瞬にして星に変わる。

そんな夏から、もう2年。
あの子のお墓参りは毎年夏に行っている、もちろん今年も行った。
あの子の好きな花と、あの子の好きな飲み物を持って富士山の見える霊園に独り足を運んだ。

去年は悲しみを引き摺り無惨にも花火の事や思い出等に浸る余裕もなく、あの子の事ばかりを考えていた。
2年も立てば悲しみが薄れ物思いにふける事も無く自然と前を向いていた。

今年は大学最後の夏を満喫しようと地元から少し離れた旅館に独り旅気分で泊まり始め、もう1週間近くになる。
明後日には実家に帰らなきゃと考えながらレポートに手を進めていた時だった。
窓の外から世界中に響き渡るかの様な凄まじい音が広がった。

風呂上がりの浴衣染みた地味な姿で窓にある障子を開けると
海が広がる、まさにその真上で様々な色彩で円を書いて広がる花火が打ち上がっていた。

懐かしさと、2年前の思い出が花火に乗せて弾けた様に思えた。

そう、あの頃も同じ様に二人並んで、この景色に見とれていた。

『もう、2年か…』

ふと思い出すと悲しみが沸き上がる。

あの子が亡くなってから恋人等作る訳も無く、ただがむしゃらに大学生活を物にしてきた。

息抜きなんて忘れて一休みなんて忘れて、ただ無意味に何かを変えようとしていた気がする。

一つ、また一つと打ち上がる花火。

一つ、また一つと思い出す光景。

まるで床に並べた絵の具を無造作に手に取り様々な色を混ぜ合わせて作り出しているかの様な気持ちになる。

きっとあの子も、今じゃ空から花火を見ているんだろう

そう思うと何故か悲しみが薄れた気がした。

決して遠くに居る訳ではなく、いつも見上げれば様々な姿で広がり続ける空の様に、あの子は側にいるのだと。

やがて花火は終わり殺風景な夜空が後に残る。

花火の爆音のせいなのか耳は暫く耳鳴りを流し続けた。

ふとした瞬間だった。

やっぱり現実から逆らう事は出来ない、馬鹿な自分を知った。

自然と涙が流れてきた。

去年の夏以降、強がる事や泣かない事が強くなる事だと、一人に慣れ一人でも生きて行く事が成長だと勘違いしていた。

現実からただ逃げていた、眠れない夜には無理矢理疲れを身体に流し気付けば朝を迎えていた。
そうして現実という概念から自らを否定して孤立した存在に浸っていた。
それはあの子からも拒絶して自らの意思を強さへと無理矢理向けていた事に気付いた。

気付いた頃には自然と涙が流れ無理に力が入っていた肩から固定概念が崩れ落ちる。

瞳の中に流れ込んだ打ち上げ花火は弾けて消えていった、それと同時に過去の記憶と、現在の醜さに気付かさせてくれた。

そう思うと、自然と笑う事が出来る。

次の日の朝は静かで波音だけが窓から流れ込む。
また来年此処に来よう、そしてまた、あの子に会いに来よう。

花火という景色の中であの子と出会う、まるで誕生日の様に。
無理矢理自分に押し付けた償いを洗い流すかの様に花火は消えていくから…
また来年と小さく空に手を振った
どことなくサヨナラと言っている感覚にも思える
しかしそのサヨナラはあの子に向けて出はなく過去の自分に向けて
…昨日、いや1秒前の過去の自分に向けて手を振った。

『また来年、会おうね』と告げて。

BIRTH.（前書き）

総ては死刑台から命が生まれる。生まれ変わっても何も変わらない、だからそこ誕生に祝福をあげるのであろう。そんな命の誕生の論文的個人文学

BIRTH.

ゆっくりと渦を巻く、ゆっくりと深く息をする。
生まれ変わる苦痛や苦しみからやっと解放されるんだ。
暗闇に慣れた細々とした手で暗い扉を開けようと必死にもがいていた。
死刑台まであと少し。
子宮の海が、頬に指に身体に波を与えまた返っていく。
神が有罪を与えた、闇の外へ未知の世界へ、無理矢理鎖を繋げ首に絡める。
神などいない、そう決めつけてしまえば楽なのに。
刹那の時間は一瞬の瞬きに変わる、無数の星々に輝きを与え無限に輝き続ける月に生命を増幅させる。
そして命は灰になり紅く燃え続け朽ちる事をしらない太陽へと帰っていくんだ。
祝福の歌が響き渡る、紅く染まった暖かな手が、私の体を闇から引き摺り出す。
死刑台は閉ざされ、もう戻る事も許してくれない。
これから再び生きるという死刑台に立たされ１３階段を未知の未来に置き換え生きていく。

再び祝福はあげられ引き摺り出されるであろう結末に、蒼穹の空は見向きもせずに広大な海の上で広がり続けるだろう。

そしてまた子宮の海に辿り着く。

逃げ場の無い、この連鎖（誕生）から生まれ変わる事の苦しみに人はいつ気付くのだろう。
生まれる事で祝福を上げ、生まれた事で喜びをあげる。
そして生まれた後には争い続け、やがて自然に逆らう事もなく鼓動は止まるのだ。

誕生とは浅はかであり、愚かな物でもあるだろう。
しかし光が優しいのは闇が窮屈だから、人が闇を意味嫌うのは、長い間、姿形もない細胞として生まれた時から、暗く狭い暗闇の中で祝福を待っていたからだろう。

再び死刑台に立ち、闇から引き摺り出された時には、身体に繋がれた重い鎖から解放され二度と戻る事を許してくれないから、誕生を祝うのだろう。

決して総てが幸せではない、始まりは死刑台から、そして繰り返す連鎖の光に生の産声をあげるだろう。

帰り道（前書き）

雨の日の帰り道。
彼女を送ってから帰宅する道は、まだ雨に濡れていた…そう過去に降った、五月の梅雨の日の様に。

帰り道

雨が降った道を一人で歩くのは憂鬱で、さっきまで喋っていた彼女は、今は遠い街で家路についている。
少なからず無事に帰宅した事に安堵し、それと同時に少なからず寂しさを覚えるのは、今が一人で、雨が降ったり止んだりしている街で、家路を急いでいるからだ。

タバコに手を伸ばすのも良いが、今は何も考えず帰りたい。
耳に垂れ流す音楽も無いが、車の走り抜ける音やバイクのエンジン音が、デパート等で流れるＢＧＭにうって変わる。
信号待ちをしていても、赤から青に変わるのは、そう長い事でも無かった。

やがて再び雨が降る、傘は持っていない。

雨の日に思い出すのは、遠い昔の悲しい出来事だ。

彼女は今はこの世に居ない。
雨の降った、あの五月の梅雨の日に信号無視をしたトラックに跳ねられ、この世から姿を消した。

別に未練がある訳では無いが、ただ少し引き止めて話をしていれば、あんな惨劇は起きなかっただろうと後悔している。
それと同時に、今の彼女だけは守り抜くと、自分自身に約束したのだ。

雨は正直好きじゃない、けれど、今の彼女と歩く濡れた道は、意外と好きだと思う。

こうやって悲しい気持ちになるのも、こうやって寂しい気持ちになるのも、過去があって今が有るからであり今があって彼女が居るからだと思う。

ふと立ち止まって見渡す街並みは、あの頃と少し変わっている様に見えた。
何が変わったなど具体的な話は出来ないが、空気は変わった。
そう感じて、また歩き出す。

一歩一歩歩き出す度に、過去に繋がれた鎖を、引き摺りながらも解いている様にも思えた。

猫の鳴き声が悲しさをかもし出す反面、『早く歩きなさい』と急かされている様に聞こえる。
早く歩けば早く家に着ける、早く歩けば鎖が音をたてずに引き摺り緩んでいく、良いのか悪いのかは、一生理解出来ない事だろう。

またタバコに手を伸ばしたが、もうすぐ家で、きっとジッポを取り出し火を付けようとしても、炎をかもしだす努力をしようとしてくれないだろう。

溜め息をつく気力も無く、また足を前へ動かす。

雨が止んだ。

泣き止んだかの様に心も落ち着き、ふと彼女からメールが届く。
その瞬間、悲しみも孤独も総て消えて、幸せと言う喜びが再び雨となって降り注ぐ。
そう、今の自分は今を生きている、過去の自分は確かに大切な存在

だが、過去を忘れたり受け入れたり、そういう事をするのでは無く、
今を生き抜く事が過去への償いなのだ。

だから愛そう、今の貴女を。
だから見ていて、今の僕を。

そう自分に伝えて、自宅のドアを開けた。
暖かい光が降り注ぐ。

今の自分は此処にいる、今の自分を愛してくれる貴女がいる。
そう思えた帰り道だった。

不眠症と記憶の間（前書き）

眠れない夜に思い出すのは辛い記憶と懐かしい記憶、やがて見出す絆に、笑顔を添えて…

不眠症と記憶の間

眠れない。
いつもは、死ぬ様に眠る俺でも、眠れない日は少なくはない。
特に最近は、沢山の事で悩み考え、辛い想いや悲しい想いに触れ、覚悟や責任に押し潰されそうになっていた。
五月のゴールデンウィークだと言うのに雨が降り、外に出る事さけも気だるく感じる。きっと眠れないのは周りの環境ではなく、自分自身の弱さなのだろう。

昔の事を思い出したのは、深夜二時を過ぎた頃だろうか。
時計の秒針が刻々と時を刻み、刻々と俺の心を刻みつける、まるで真っ赤なハートに針を一秒毎に刺されている感覚に近い気がする。
あの頃も同じだった、眠れない日々が続き、死を望んでいた。普通に考えれば、死ぬ程でも無いだろうと笑って終える事でも、当時の俺には辛い出来事だった。
中学生時代、酷い虐めを受けた、全校生徒からの奇声罵声、仲間はずれに無視、机が無かったりした事も多かった。
そんな時に出会った奴は、頭は金髪の長髪、鋭い目付きで圧迫された、そこに居るだけで、存在がヒシヒシと伝わってくるのがわかった。
最初は軽いイザコザだった、学校の事で苛々していた俺は、夜の世界で暴れ回っていた。当然、目を付けられて追いかけ回された事もある、そんなある日、その長髪の金髪野郎と出会った。
最初は怖かった、一歩一歩近付くにつれて皮膚が千切れそうな感覚を覚えた、しかし近付く奴を見ていると恐怖は消え、逆に立ち向かおうとしている自分が居た。
結果は引き分け、その後も何度も何度も同じ事を繰り返した、しかし結論は出なかった。

違う、結論が出なかったんじゃない…引き分けた事自体が結論なんだ。
今更ながら当時の事を思い出すと馬鹿な様に笑えてくる。共に暴れて笑って泣いて、辛い時も共に歩んだ”仲間”だった。
最高な一時だった…そんな事を思い出していた矢先に、奴からメールが来る、噂をすればなんとやら…ちょっと違うが、そんな感じだ。
奴はアメリカに居る、夢の為に日本を離れた。
応援したいから見送った俺も、今じゃただの人間だ、夢も将来も無いけど、ここに居る。

人は、近くに居ても居なくても、絆があれば繋がり続ける、赤い糸ではないが、黄色い、明るい色で繋がり続けている。
相手が亡くなって様が、歳上だろうが歳下だろうが、繋がり続けている。
その分、簡単に切れやすい、だから無意味にも大切にしていまうんだと思う。
眠れなくても、絆があれば、また笑顔になれる。
不眠の苛々が喜びの笑顔に変わる。
いつだってそうだった、辛い出来事の先には、また新しい未来があるんだから、焦らなくても良い、走らなくても良い、今は自分のペースで自分を作るんだ。
だから眠れない自分も今の自分なんだ…。

雨音が遠くに消えて行く。
次第に意識も遠のいて行く。
時計の針は眠りのカウントダウンを始めた、目覚める保証もない夢の世界へと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9900f/

林檎の木

2010年10月28日02時46分発行